

もりあがる教化研究活動

——草の根の日蓮宗教師による布教実践——

信仰の興隆と教団の使命

——第三回教化研究會議の報告——（昭和四十五年十月六、七日）

農村寺院伝道における

教化の問題点

木名瀬 寛 明

去る五月に東北六県の教化研究集會が開かれ、第一回として、まずまず、東北六県の住職たちがどういう面で悩んでいるかということは摘出されたように思う。東北には昔のような、かやぶきやねの、いかにもお粗末な、娘を都市に売りに出したというような貧困のイメージは、現在はなく、どここの家もみな近代的な建物で、耕うん機、トラッ

ク、乗用車などをもっている農家も多い。青年たちも、現代のいわゆるカッコイイ、イカシタ青年が多い。電化製品も普及している。こういう風正大正や昭和初期の農家とは違つて来ている。それと同時にまた、現代の社会問題の多くの波が農家にも押しよせている。例えば、減反の問題だとか経済的格差の問題というような大きな問題を農家はかかえている。これに対して、東北の住職たちはどのようにして教化活動をしていくべきかということになると、暗中模索の状態である。第一、農家自体の本当の苦しみがどこにあるかということ、農家自身が意識していない場合が非常に多い。農家自体が迷っているところへきて、我々住職がどのようにして、農家の人たちに教化をするかが分ら

ない。

農村も都市化してきている。都市とか農村とかという区別はつかなくなってきた。その中であって、住職は一人で何から何までやっていかなきゃならないという現状である。中には、ハガキ伝道あるいは機関紙などを自分で作っている人があっても、経済的にはだんだん行き詰ってくるといふ状態である。

そこで、そういう背景のもとに今後の教化について、どういふ問題点が出て来るかというところ、まず第一には、地域社会とのつながりの問題である。住職たちは、民生委員や保護司あるいは学校の先生などをやって、それぞれに地域の住民とつながってはいるが、まだまだそれだけでは足りないものが沢山ある。自分の身に本當に困った問題が起きた時には、皆、お寺に相談に来るかというところ、そうではない。なかなかお寺へ本當の苦悩のひだのところまでは見せない檀徒が多い。見せないというより、見せてもしようがないだろう、また見せられた住職もこれに対してどういふ策をすればいいのか迷う場合が非常に多い。こういう問題でもっともって研究していかなければいけない。

第二は檀信徒とのかわり合いの問題である。檀家の人がお寺へ来る場合、自分の先祖あるいは墓標に対する觀念が非常に強い。ところがお祖師さまに対する考え方、またいわんや宗門とのつながりなどということになると、全然

これはゼロである。それが為に往々にして東北では、よその地区から見ると、お墓やお位牌所が非常に立派であるのに対して、本堂はまことに粗末である。こういう現象が東北の場合には一般に多い。お寺の本堂、庫裡にはあまり寄附をしないけれども、お墓を作るには何十万という金も惜しくはないという傾向なのである。また、自分たちの病氣とかいった實際的な色々の問題で困った時には、すぐにおがみやさんが来る、お寺には来ない、という問題が存在している。今後どういふ風にしていわれる宗門意識というものをもたせていくか、というところに一つの大きな問題がある。

第三に、信仰のあり方の問題である。信仰の内容およびその姿がどこにあるべきかという問題、これが我々住職自身としてもちよつとつかみ難い。またそれをどういふ風に檀信徒に教えていくかという問題に関して、各自バラバラに、住職の考え方のままにやりまくるので、Aのお寺の檀家とBのお寺の檀家とで信仰の仕方が違ってきてしまう、ということがある。これが今後の残された問題である。

第四に、僧侶のあり方の問題である。東北農村の場合、お坊さんというものに対する旧来からの固定した觀念があつて、坊さんは頭をのぼすべきでない、なまぐさものを食うべきでない、といったような考え方が強い。髪をのばした坊さんが来ると、あれは何だあれは坊さんか、という。

東北農村における信仰意識調査

望 月 一 靖

この夏、秋田の方に参りまして、東北農村の宗教の意識調査をいたしました。細いデーターは、また後にお渡しすることにして、ここではお詳しいお話をすることはできませんので、問題点となるところを、かいつまんでお話いたします。

先ず、お話ししなければならないことは、一体何故われわれが農村の意識調査をしなければならないかという理由からお話したいと思います。

この教化研究会で毎回取り上げられております日蓮宗の教化布教の在り方という問題が根本的に考え直さなければならぬ時期に來ているのではなからうかということです。その根本的に考え直すということは何かというと、一つは、われわれの教化の在り方が、今の社会、現代の人たちの心にどのように訴えているであらうか。昔からの伝統的な教化方法にのりながら活動しているわけですが、いったい現代人は何を求め、何を求めているのだらうか、というところを宗門人としてどう受けとめどう対処してゆくかという考え方がまだなかった。それぞれ教化されている方

俺はあんな坊主は大嫌いだ、と、もう見ただけですぐそういう風にいう。こういう考え方の所において、しからば我々はどうすべきか、どういう姿でいくべきか、というところに一つの問題がある。東北六県教化研究会の第二日目に、農村青年たちを六人位呼んでいろいろ話し合ったが、彼らは、坊さんというのはこんなことまで考えているのか話し合っているのか、という驚きの目をもって我々を見ていた。坊さんというのは、お葬式をやってお布施をもらえばそれで終るもんだ、という風に考えていたという。ところが、自分たちの悩みの問題まで、どうしたら解決できるのかということまで考えていたのか、と驚いていた。それだけ坊さんというものは、一つの型にはまったものとして見られていたのである。今後、坊さんというのは、どういう姿であるべきかということ、まず自分たちなりに、はっきり把握することが大事である。

第五に、文書伝道の協同化の問題である。文書伝道は個人でやっているには限界がある。一つには費用の問題がある。それから、実際に原稿を集めたり、文章を書いて印刷物にするということがなかなか大変である。そこで今後の問題点としては、先ほどの都市伝道の問題の報告にもあったが、住職個人個人ではもうどうにもならない段階に來ているということである。みんなが手をつながなければ対処していけないというのが現状だと思う。